

原 著

介護老人保健施設における易転落者の スクリーニングについての検討

Screening Test for the Risk of Falls of Elderly Nursing Home Residents

上内 哲男^a
Tetsuo KAMINAI^a

富樫 早美^b
Hayami TOGASHI^b

小松 泰喜^a
Taiki KOMATSU^a

田中 尚喜^a
Naoki TANAKA^a

木村 貞治^c
Teiji KIMURA^c

上岡 洋晴^d
Hiroharu KAMIOKA^d

武藤 芳照^e
Yoshiteru MUTOH^e

^a 東京厚生年金病院リハビリテーション室 ^b 介護老人保健施設シオン

^c 信州大学医療技術短期大学部理学療法学科 ^d 身体教育医学研究所

^e 東京大学大学院身体教育学講座

^a Department of Rehabilitation, Tokyo Koseinenkin Hospital

^b Nursing Home Sion

^c Department of Physical Therapy, School of Allied Medical Sciences, Shinsyu University

^d Laboratory of Physical Education and Medicine

^e Department of Physical and Education, Graduate School of Education, The University of Tokyo

Abstract

The purpose of the present study is to elucidate the availability and validity of screening level of a simple screening test employing the level of activities of daily living and psychological status to predict the risk of falling in order to take measures to prevent falls among nursing home residents. The subjects were 90

代表者連絡先：〒162-8543 東京都新宿区津久戸町5-1

東京厚生年金病院リハビリテーション室 上内哲男

TEL 03-3269-8111(内線2517) FAX 03-3260-7840

E-mail kaminai@rc5.so-net.ne.jp

elderly nursing home residents. We reviewed episodes of falls for a year and analyzed the gender, number of falls, Barthel Index (BI), HDS-R and the term of admission of people to the nursing home. Results suggested that results of the BI and HDS-R are predictive of the risk of falling more than twice. Certain screening levels of the BI and the HDS-R were determined thereafter. High sensitivity and specificity of the cut-off value were 53 for the BI and 9.7 for the HDS-R. Conclusion: Because these screening tests were so simple that the tests and each screening level were practically useful as screening to prevent falls.

Key Words : Fall Prediction, Barthel Index, The Revised version of Hasegawa Dementia Scale (HDS-R), Screening

転落予測, パーセルインデックス, 改訂長谷川式簡易知能評価スケール, スクリーニング

1. はじめに

転倒による骨折は、高齢者にとって活動性を低下させる大きな要因の1つであり、骨折に至らないまでも、転倒に対する恐怖心から外出を控えるといった心理状態の変化が、高齢者の活動性に大きな影響を与えることが知られている^{1,2)}。転倒を予防するということは、活動性や日常生活動作(以下, ADL)能力を維持し、健やかな生活を送るための第一歩である。同様にベッド、椅子・車椅子などからの転落やそれに伴う骨折等の外傷も、特に痴呆傾向のある高齢者を中心に多く見受けられ、高齢者の活動性やADL能力低下の大きな要因となっている。これらのうち、転倒の予防に関しては、1997年から当院で開設した日本初の「転倒予防教室」をはじめとして、厚生労働省の介護予防事業における「転倒・骨折予防教室」に関連したさまざまな取り組みが全国各地で行われ、着実に成果をあげてきている³⁾。しかし、転落の予防に関しては、原因論的に転倒とは一線を画しているにもかかわらず、転倒と同次元上で扱われることが多く、転落単独での状況把握やリスクファクターの検討は十分行われていない。また、老人保健施設等における転落防止対策も、転落歴のある者について、ベッドや車椅子に過度の抑制を強いる場合が多く、科学的根拠に基づいた予防対策を講じているとはいえない状況である。

本研究の目的は、介護老人保健施設の入所者を対象として、転落のリスクファクターについて検討を行うこと、施設の看護・介護スタッフが日常的に使用している評価法を用いた、簡便な転落予

防に関するスクリーニング基準値の有効性と妥当性について検討を行うことである。

2. 対象

平成11年7月から平成12年6月までの1年間に、茨城県内のS介護老人保健施設に入所していた90名(以下, 入所者)を対象とした。性別は、男性25名、女性65名であり、入所者の平均年齢は83.6歳(64~98歳)、平均入所期間は279日(61~366日)であった。

3. 方法と統計処理

S介護老人保健施設における介護・看護記録から、入所者の年齢、性別、転落の有無、転落回数、転落状況、入所期間等を調査した。また、入所者のADL能力の評価としてパーセルインデックスを、精神機能の評価として改訂長谷川式簡易知能評価スケール(以下, 長谷川式簡易知能スケール)を用いた。パーセルインデックス、長谷川式簡易知能スケールとも、入所時と入所から3ヶ月ごとに評価・再評価を行っており、転落事故が発生した場合には、その時点での最新のものを評価値として採用した。

入所者のうち、偶然的転落を排除するために2回以上の転落を繰り返す群(以下, 転落群)と転落回数が1回以下の群(以下, 非転落群)の2群に分類し、年齢、性別、パーセルインデックス、長谷川式簡易知能スケール、入所期間の5つの変数についてMann-WhitneyのU検定を用いて群間での比較を行った。また、これらの5つの変数を